

英語の自動詞と他動詞の区別について — to screen を出発点として

渡 辺 勉

On the Transitive and the Intransitive Verbs in English: “to screen” as an Example

Tsutomu WATANABE

Summary

This research looks into the background in which the following sentence is used: This funny, and harrowing, American-made cameo of Japan's domestic dolphin hunt has screened in Australian cinemas and in 14 countries. To the non-native speakers of English, the underlined part “has screened” appears to be a mistake for “has been screened,” which is not the case. The rationality of employing the active form instead of the passive one in the above sentence is pursued in terms of Jespersen's (1949) idea of “activo-passive” and Lyons' (1968) idea of ergativity. The pros and cons are discussed about applying the idea of ergativity to the analysis of English.

キーワード：自動詞, 他動詞, activo-passive, COBUILD (1987), ergative

目 次

1. 始めに：奇妙な自動詞
2. 伝統文法による説明
3. 理論言語学による説明
4. COBUILD (1987) における ergative verbs の分析
5. COBUILD の文法書における ergative verbs の記述
6. 結び

1. 始めに：奇妙な自動詞

大学用の英語教科書で(1)のような英文に出会った。

- (1) This funny, and harrowing, American-made cameo of Japan's domestic dolphin hunt has screened in Australian cinemas and in 14 countries. (Andrew Darby, *The Sydney Morning Herald*,⁽¹⁾ March 10, 2010 下線は筆者による)

下線部は“has been screened”の誤りではないかという疑問がわいた。

screen を英和辞典で調べてみると、収録語数の多い辞書には自動詞用法が記述されている。『リーダーズ英和辞典』(第3版)は「上映される；映画に向く」という語義記述に続いて次のような例文を記載している。

- (2) This play [actor] screens well [badly]. (リーダーズ英和辞典 2012: 2104)

例文(2)では、well, badly という副詞が付いているのが特徴的である。

『ジーニアス英和大辞典』(2001: 1935)では「〈劇・俳優が〉映画になる」という語義の前に、「様態の副詞を伴って」という記述があり、例文(2)の副詞は偶然使われているのではないということが推定できる。

『新英和大辞典』(第6版)には次のような例文が記載されている。

- (3) The film screened from coast to coast. (新英和大辞典 2002: 2210)

例文(3)には様態の副詞はない。しかも screened は過去形で使われていて、例文(1)に対すると同じように“was screened”にする必要はないのかという疑問がわく。さらに、『新英和大辞典』(第5版)には(3)の例文は出ていない。1980年と2002年の間に編集部で発見された用例であろうと推定できる。比較的新しい用法であるかもしれない。

例文(1)はオーストラリアの新聞が出典である。The Macquarie Dictionary (1991)を引いてみると、語義 21 に自動詞として“to be projected, or suitable for projection, on a screen”と定義されている。オーストラリア用法であるとか、様態の副詞をとまなうなどの注記はない。

screen のこの自動詞用法がいつ頃生まれたのかを探るために OED on line を調べてみる。screen⁽²⁾を引いてみると、語義 15b で“To be shown at the cinema or on television, esp. at a particular time or place”と記載されている。用例を年代と使用地域を入れて引用する。

- (4) The film will screen at the Brooklyn Apollo in the near future.

(1940 アメリカ)

(5) The series will screen between 5.30 pm and 7 pm. (1986 ニュージーランド)

(6) ‘Scandal’ (1950), the most rarely seen of all Kurosawa films, screens only at the Nuart as part of its Kurosawa Festival. (1986 アメリカ)

(7) The second series of *Kath & Kim* will screen in the US from April.

(2003 イギリス)

OEDでの初出年代は1940年であるが、残りの3例は1986年と2003年で比較的新しい用法であることが分かる。アメリカ2例、ニュージーランド1例、イギリス1例で、1地域に限定された用法ではないと言える。

他動詞用法は、語義15aで“To project on to, show, or broadcast on a screen; *spec.* to show at the cinema or on television”と記載されている。用例の初出は1912年である。用例は5個出ている。受動態が4件、能動態が1件である。それぞれ、典型的な例を1つずつ引用する。

(8) ‘Tommy Atkins’, a stirring patriotic picture, will be screened at an early date. (1915 イギリス)

(9) Beydler screened the film in a gallery to little interest. (2015 アメリカ)

辞書類、特にOEDの情報により明らかになったことを図式的にまとめる。動詞screenは「上映される、上映する」の語義で3つの用法が可能である。(a)主語+screen(自動詞)、(b)主語+be screened(他動詞の受動態)、(c)主語+screen+目的語(他動詞)の3つである。

小論の目的は、screenで例示された自動詞、他動詞の受動態、他動詞の3つの用法は、同じ動詞の中で併存するものなのか、意味や用法の違いはあるのかを明らかにする手がかりを探ることである。さらに、辞書の中で1つ1つの動詞を記述すれば十分なのか、あるいは文法理論で対応できる問題かどうかとも明らかにしたい。

2. 伝統文法による説明

『リーダーズ英和辞典』と『ジーニアス英和大辞典』では自動詞用法のscreenは「様態の副詞を伴う」と記述し、前者は次のような例文を示している。

(10) [= (2)] This play [actor] screens well [badly].

類似の記述が学習文法で扱われているかどうかを探してみる。江川（1991: 186）は、peel, pour, read, roast, sell, wash, write の 7 語⁽³⁾ を例文つきで取り上げている。sell の例文を引用する。

(1) This book sells well. (江川 1991: 186)

江川は例文(1)について、「この sell は「(人が本を) 売る」から「(本がよく) 売れる」と自動詞化したもので、肯定文ではふつう様態を示す副詞を伴う」と説明している。さらに次のような例文を挙げてこの用法に制限があると指摘している。

(2) The house sold yesterday. (江川 1991: 187)

(3) The house was sold yesterday. (江川 1991: 187)

江川は(2)は(3)の意味では使えないと指摘している。

筆者も(2)はアスタリスクかクエスチョンマークがつく文だろうと考えた。ところが、念のために Google 検索オプション⁽⁴⁾ で調べてみると(4)のような例が見つかった。

(4) Hi Barb. The house sold yesterday. I know, I know, the market's depressed. Anyway, I'm leaving the area. Some things I have to do. Things I couldn't do while you were here. Maybe you would have approved. Hell, I know you wouldn't have. (beat) I've tried everything and I can't seem to get their attention. But now they'll learn how it feels on the other side. Let's hope it elevates their thinking. (下線部は筆者)

Jonathan Hensleigh による THE ROCK⁽⁵⁾ という映画の台本の一部である。1995 年 10 月 10 日に作成したもののようである。(4)の当該文は「昨日売れた家」とも解釈できるが、「その家は昨日売れた」という解釈は排除できない。BNC Online と Wordbanks Online で検索してみると “house sold” と “sold yesterday” という連鎖は見つからない。

なお、この種の動詞に副詞が伴わない例があり得ることを（江川 1991: 186）は次の例文で示している。

(5) This sweater looks beautiful. Will it wash? (江川 1991: 186)

「様態の副詞を伴う自動詞」については、まだ調査が必要である。

綿貫 (2008: 586-587) は「能動受動態」という概念を紹介している。能動受動態になれる動詞を 21 個挙げている。bake, clean, compare, cook, cut, eat, feel, handle, keep, lock, open, read, rent, reprint, ride, sell, show, shut, tear, wash, wear の 21 語⁽⁶⁾ である。このリストには sell は入っている。残念ながら例文(1)で取り上げた screen は入っていない。

綿貫は能動受動態を次のように記述している。「能動態の形の動詞が受動態の意味を表すことがある。日本語では「売れる」「読める」などの意味になる動詞で, well, poorly などの副詞を伴うか, 否定の形で用いられるのがふつうである。」5つの例文には全て副詞が伴っている。能動受動態と受動態を比較して次のような例を挙げている。

(16) This car handles well. (綿貫 2008: 586)

(17) This car was handled well. (綿貫 2008: 586)

例文(16)は「車」自体に優れた操作性が備わっていることを示すと説明している。これに対して(17)は車を「運転する人」の操作する力がすぐれていること、あるいは扱いがよくて長持ちすることを示すと説明している。綿貫は同じ動詞の自動詞用法と他動詞用法の受動態の双方が可能な場合があるとして次のような例を挙げている。

(18) The doors open at 8:00. (綿貫 2008: 587)

(19) The doors are opened. (綿貫 2008: 587)

例文(18)について、綿貫は、だれかが開けるわけだが、特に行為者を示さずにこの形で用いられていると述べている。例文(19)については綿貫の記述はないが、受動態を使うことで行為者がいることを暗示しているということだろう。例文(1)の has screened は has been screened にも置き換えられそうだが、意味の違いはどうなるのかと考えるきっかけになる。

綿貫が用いている「能動受動態」という用語は、Jespersen (1949: 350) の *activo-passive* を市川 (1953) が訳したものである。大塚 (1970) でも使われている。ここでは、原典である Jespersen (1949) 第 III 巻の pp. 347~352 の記述を紹介する。

Jespersen は句動詞を含む 35 個の動詞が能動受動態として使われている例を例文と共に取り上げている。act, add up, beggar, brush off, button, compare, cook, cut, digest, draw, drink, eat, feel, form, hook, let, listen, pawn, photograph, read, rhyme, rub off, sell, smoke, stain, strike, tear, tell, translate, transmit,

transplant, wash, wear, write の 35 語である。例文(1)の screen は出ていない。

Jespersen (1949: 350) は能動受動態の特色は形態上は能動態の動詞に受動態の意味が与えられていることだと指摘している。この用法には制限があると Jespersen は説明しながら、例えば、“this house sold yesterday”を“was sold yesterday”の意味で使うことができないと述べている。これは江川 (1991) でも採用されている説明である。ただし、例文(14)で指摘したように、さらに検討を要する問題もある。

Jespersen (1949: 351) は、さらに能動受動態が使われる条件を述べている。次のような例を挙げている。

(20) His novels sell very well. (Jespersen 1949: 350)

例文(20)では「小説」がよく売れるのは小説そのものが「活動的 (active)」だからで、本屋の活動はあまり考えられていないということである。つまり、能動受動態では「主語 (subject)」の特徴を記述するので、説明のための形容詞や副詞を伴うことが多いと説明している。形容詞や副詞の代わりに、will が使われることがあるとして、次のような例を挙げている。

(21) The figures will not add. (Jespersen 1949: 351)

この説明は例文(15)で取り上げたように江川 (1991) も採用している。

例文(2)で取り上げたように、『リーダーズ英和辞典』と『ジーニアス英和大辞典』は自動詞用法の screen を能動受動態の用法と扱っているようである。どちらの英和辞典にも activo-passive は見出し語として掲載されている。残念ながら、個々の動詞の記述には「能動受動態の用法」のような説明はない。

Jespersen の記述により、能動受動態の用法ではないかと思分ける基準は 2 つあることが分かった。1 つめは説明のための形容詞や副詞を伴っていること、2 つめは助動詞 will を伴っていることである。しかし、例文(1)と(3)の screen を能動受動態の用法であると断定する根拠としては弱いように思われる。また、35 の動詞が取り上げられているが、この用法が他の動詞にも広がっていくような生産性をもっているのかどうか不明である。

3. 理論言語学による説明

2 節では screen の自動詞用法を伝統文法に出てくる能動受動態という概念で説明す

る可能性について議論した。3 節では伝統文法の後に発展した理論言語学の中の考え方で screen の自動詞用法を説明する可能性を検討する。

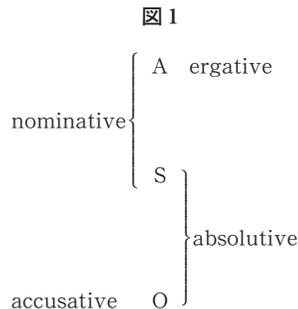
能格言語と呼ばれる言語がある。下宮（1979: 102）にはバスク語の次のような例が出ている。

- (2) Ama etorri da (母が来た) [自動詞文]
 母 (主格) 来る です (3 人称単数)
- (3) Amak ogi-a erosi du. [他動詞文]
 母 (能格) パン (主格)+定冠詞 持つ (3 人称単数) (母がパンを買った)

下宮（1979: 251）は、主格⁽⁷⁾には格語尾がなく、自動詞の主語、be 動詞の主語と補語、他動詞の目的語として用いられると述べている。例文(2)の ama, 例文(3)の ogi- が主格に置かれている。さらに、下宮は能格の語尾は -k, -ek で他動詞の主語として用いられると述べている。例文(3)の amak が能格に置かれている。バスク語では能格の格語尾が存在する。形態論の領域の問題である。統語論の問題としては能格を取った名詞は他動詞文の主語になる。自動詞文の主語と他動詞文の目的語は主格に置かれる。バスク語では語尾はゼロである。

Dixon (1994: 6) は、普遍文法の立場から、世界の言語には全て intransitive subject (自動詞の主語：S と略称), transitive subject (他動詞の主語：A と略称), transitive object (他動詞の目的語：O と略称) の 3 つの文法関係があると言う。主格対格 (nominative-accusative) の文法をもつ言語では S と A がひとまとまりになり、絶対格能格 (absolutive-ergative) の文法を持つ言語では S と O がひとまとまりになると説明する。上の下宮（1979）の例では自動詞の主語と他動詞の目的語が同じ格形、「主格」を取っている。後者の例である。

Dixon (1994: 9) は、この 2 種類の文法体系を下のように図示している。



Dixon (1994: 9) は主格対格の文法体系を持つ言語では S と A が同じように扱われ、O は別に扱われると説明している。次のようにラテン語で例示している。

(24) domin-us veni-t. “the master comes” (Dixon 1994: 9)

(25) domin-us serv-um audi-t “the master hears the slave” (Dixon 1994: 9)

(24)と(25)の -us は名詞の単数主格の語尾である。確かに S と A が文法上は同じように扱われている。(25)の -um は名詞の単数対格の語尾である。

Dixon (1994: 10) は絶対格能格の文法体系を持つ言語では S と O が同じように扱われ、A が別に扱われる様子を Dyirbal (ジルバル語) で例示している。

(26) ŋuma banaga-nʷu (Dixon 1994: 10)

father + ABS return-NONFUT

father (S) returned

(27) ŋuma yabu-ŋgu bura-n (Dixon 1994: 10)

father + ABS mother-ERG see-NONFUT

mother (A) saw father (O)

(26)と(27)で ŋuma が使われている。(26)では自動詞の主語 (S) に、(27)では他動詞の目的語 (O) になっている。明示的な格語尾はないが絶対格 (absolutive) を取っていると分析される。(27)の yabu-ŋgu は他動詞の主語 (A) になっている。ŋgu は能格 (ergative) の格語尾である。

なお、ラテン語でもジルバル語でも、格語尾で主語か目的語かの区別ができるので、上の(25)と(27)では A と O を入れ替えても意味は通じる。しかし、次の英語の例では入れ替えて意味が変わってしまうと Dixon (1994: 10) は指摘する。

(28) The master hears the slave. (Dixon 1994: 10)

(29) The slave hears the master. (Dixon 1994: 10)

Dixon (1994: 11-12) は、英語では S と A がひとまとまりになって統語的に機能している様子を次の例文で示している。

(30) Father (S) returned. (Dixon 1994: 11)

(31) Father (A) saw mother (O). (Dixon 1994: 11)

- (32) Father returned and saw mother. (Dixon 1994: 11)
 (33) Father saw mother and returned. (Dixon 1994: 11-12)

(32)は(30)と(31)から father (A) を省略したものを and で結んで生まれたものである。(33)は(31)と(30)から father (S) を省略したものを and で結んで生まれたものである。S または A の役割を担っている主語名詞は片方を省略できるのである。

ところが同じ名詞でも、片方が主語 (S) で、もう一方が目的語 (O) の役割を担っている場合には省略ができないという。Dixon (1994: 12) は次のような例示をしている。

- (34) Father (S) returned. (Dixon 1994: 12)
 (35) Mother (A) saw father (O). (Dixon 1994: 12)
 (36) *Father returned and mother saw. (Dixon 1994: 12)
 (“Father returned and mother saw him” の意味で)
 (37) *Mother saw father and returned. (Dixon 1994: 12)
 (“Mother saw father and he returned” の意味で)

英語では(36)で father (O) を削除したまま him を補わなければ意味不明である。(37)では father (S) を削除したまま he を補わなければ意図した意味は伝わらない。英語の世界では当たり前のことであろう。

しかしながらジルバル語では次のような文が可能だという。

- (38) ηuma banaga-n^ɣu yabu-ηgu buran
 father + ABS return-NONFUT mother –ERG see-NONFUT
 father (S) returned and mother (A) saw him (O) (Dixon 1994: 12)

(38)では buran (“saw”) の目的語 ηuma (“father”) が明示されていない。S の役割を果たす名詞 ηuma と共通なので O の役割を果たす名詞の方が省略されたのである。つまり、(38)はジルバル語が S と O がひとまとまりになる (絶対格) 能格言語であることを示す統語的証拠ということである。逆に英語は(34)~(37)の証拠から (主格) 対格言語であり、(絶対格) 能格言語ではないということになる。

形態論的には英語はどちらのタイプの言語だろうか。Dixon (1994: 19) は次の3つの特徴に着目する。(a)英語の名詞には格変化はない。しかし、代名詞には主格 (nominative) と斜角 (oblique) の区別があり、主語になる名詞 (S または A) は主格を取る。目的語 (O または前置詞の目的語) は斜角を取る。(b)主語が S か A かに関

わず動詞が3人称単数現在の場合には動詞に語尾-sがつく。(c)SとAは動詞の前に来る。Oは動詞の後に来る。これら3つは全て主格対格の文法体系を英語が持っている証拠だとDixonは説明する。

Dixonは英語は統語論的にも形態論的にも能格言語ではないと分析している。しかし英語の分析にergativeという概念を持ち込む人々がいると批判する。Dixonは3種類の主張を批判している。

1つめの批判はLyonsに向けられている。Lyons(1968:352)は次のような例⁽³⁹⁾にergativeを使っている。

(39) The stone moved. (Lyons 1968: 352)

(40) John moved the stone. (Lyons 1968: 352)

Lyonsは(39)と(40)の2つの文の間の統語関係をergativeと呼ぶ。さらに自動詞の主語が他動詞の目的語になるとLyonsは分析し、その他動詞の新しい主語をergative subject(能格主語)⁽³⁹⁾と呼ぶと提案している。DixonはLyonsが主語の種類を表す記述のラベルに使っていると批判する。筆者もLyonsが「能格または使役変形(an ergative or causative transformation)」という表現を使っている部分に問題が内在していると考えます。まず、使役(causative)という表現が使えることを自ら表明している。Dixonは触れていないが、Lyonsは同じページで、動詞moveは自動詞文と他動詞文が使役性(causativity)によって結びついている例だと述べている。また、Lyons(1968:359)ではcausative verbsの例として、moveの他にbegin, break, change, close, crack, develop, grow, open, split, start, stop, tearがあると述べている。Lyonsにはergativeという用語は必須ではなさそうに思われる。

さらに「変形(transformation)」という概念を使っていることから、2つの文(39)と(40)をありのままに観察しているのではなく、両者を「変形操作」によって結びつけようとしているということが分かる。

2つめの批判はBurzioとPesetskyに向けられている。

(41) John opened the window. (Dixon 1994: 20)

(42) The window opened. (Dixon 1994: 20)

DixonによるとBurzioとPesetskyは(41)のwindow(O)と(42)のwindow(S)を“ergative set”と呼んでいるという。DixonはSとOのまとまりをergativeと呼ぶのは不適切であり、敢えて言うならばabsolutiveだと批判している。

3 つめの批判は Halliday と Andersen に向けられている。

- (43) Mary washed the woollens well. (Dixon 1994: 20)
- (44) The woollens washed well. (Dixon 1994: 20)

Halliday⁽¹⁰⁾ と Andersen⁽¹¹⁾ は(43)では washed の目的語 woollens (O) が(44)では washed の主語 woollens (S) になっていることを ergativity (能格性)と呼んでいる。それは不適切だと Dixon は批判する。

Dixon は次の(45)から 4 個の文を派生させることができると主張している。

- (45) Mary washed the woollens with Softly in the Hoovermatic.
(Dixon 1994: 20)
- (46) Mary washed the woollens well (with Softly in the Hoovermatic).
- (47) The woollens washed well (with Softly in the Hoovermatic).
- (48) Softly washed the woollens well (in the Hoovermatic).
- (49) The Hoovermatic washed the woollens well (with Softly).

毛織物衣類 (the woollens) の洗濯が上手く行った原因によって異なった文を使うことができるかと Dixon は主張する。(46)は Mary の働きがよかった場合、(47)は毛織物衣類の素材が優れていた場合、(48)は洗剤が優れていた場合、(49)は洗濯機の性能が優れていた場合というように使い分けられるというのである。Dixon はこれらの例を「主語でない名詞が主語に昇格すること (promotion of non-subject NP to subject)」と呼ぶことを提案している。確かに主語に昇格できるのは目的語だけではないということは分かる。しかし Dixon は統語論的に何が起きているのかという説明はしていない。

Dixon (1994: 18) は同じ動詞が自動詞または他動詞として使われる現象を 2 つのタイプに分けている。なお、例文中の S, A, O は筆者が追加した。

- (50) He (S) is knitting. (Dixon 1994: 18)
- (51) He (A) is knitting a jumper (O). (Dixon 1994: 18)
- (52) The soldiers (S) marched. (Dixon 1994: 18)
- (53) The officer (A) marched the soldiers (O). (Dixon 1994: 18)

Dixon は(50)と(51)で使われている動詞 knit を S=A タイプと呼び、(52)と(53)で使われている動詞 march を S=O タイプと呼ぶと提案している。Dixon は S=A タイプの動詞の

例として, eat, help, know, speak, try, watch を挙げ, S=O タイプの動詞の例として break, burst, cool, grow, hurry, move, open, twist, walk を挙げている。(1)の screen は例に挙がっていないが Dixon の分析に従えば, S=O タイプの動詞だということになると思われる。なお, S=O タイプの動詞 10 語は Jespersen (1949: 350) が能動受動態として使われる例に取り上げている 35 語とは一致しない。

これまでの議論から ergative という概念を使って自動詞文と他動詞文の関係を説明することは英語の分析には適切ではなさそうに思われる。英和辞典の記述を確認してみると、『ランダムハウス英和大辞典』(1994: 896), 『ジーニアス英和大辞典』(2001: 738), 『リーダーズ英和辞典』(2012: 784) では, ergative という用語が, バスク語, グルジア語, エスキモー語などに使われる場合と, Dixon が批判しているような意味で英語の記述に使われる場合とを区別して記述している。

ところが, ergative の概念を全面的に記述に取り入れた英和辞典が存在する。『ルミナス英和辞典』(2001) である。前書きで「同じ動詞が自動詞にも他動詞にも使われることが多いのが英語の特徴である」と述べ, 能格動詞 (ergative verb) と呼ばれると紹介している。特に重要な動詞には囲みをもうけて説明している。例えば, p. 307 では close⁽¹²⁾ の見出しの発音記述に続いて語義記述の前に次のような囲みがある。

図 2

他 自 の 転 換	
他	1. 閉じる, 占める (to make (something) shut)
自	2. 閉じる, 閉まる (to become shut)

『ルミナス英和辞典』は本文中で能格動詞という用語を使っているわけではない。「他自の転換」という記述をしているだけである。巻末の文法解説の中に能格動詞という項目があり, boil と open を例に挙げて他動詞用法と自動詞用法を説明している。どの動詞に「他自の転換」の表示をつけているかはまだ未調査である。残念ながら例文(1)の screen には表示はない。『ルミナス英和辞典』が能格動詞という考え方を取り入れた理由は COBUILD (1987) が ergative verbs という記述を始めたからではないかと思われる。次の 4 節では COBUILD (1987) での記述の様子を詳細に検討する。

4. COBUILD (1987) における ergative verbs の分析

Collins Cobuild English Language Dictionary (以下 COBUILD (1987) と略称) は英語を学び使う英語を母語としない英語学習者のために編纂された辞書である。それ以前の英語辞書にはなかった特色がある。ergative verbs の記述を始めて取り入れた英語辞書である。その関連で小論と関係する2つの特色に言及する。

1つ目の特色は、用例 (examples) である。COBUILD (1987: xv) は “These examples are taken from actual texts wherever possible.” と述べている⁽¹³⁾。実際に使われた英語から用例を採用している。「実際に使われた英語」というのは決して古いものではない。COBUILD (1987: xxii-xxiv) の出典を見れば、おおよそ1950年代から1980年代の書籍からコーパスが作られたことが分かる。この辞書の出版時点で最新の用例を使ったと言ってよい。

2つ目の特色は、Extra Column の採用である。COBUILD (1987: xvi) は、“The main aim of the Extra Column is to provide the more advanced students with structural information, extending the statements of the main entry. It gives a word class, and indicates the range of syntactic uses.” と述べている。上級の学習者のための文法情報の1つに V-ERG というものがある。ergative verbs (能格動詞) のことである。本文中 (p.1620) に V-ERG という見出しがある。説明と例文を以下に引用する。なお、説明の中の語例と例文を引用符で囲み、例文に(a)~(i)を加えたのは筆者である。

In this dictionary V-ERG is used in the grammar notes beside entries to describe verbs which are both transitive (V+O) and intransitive (V) in the same meaning. They are described as V-ERG because there is restriction on the type of subject which can be used with the intransitive verb. With V-ERGS, the object of the transitive verb can be used as the subject of the intransitive verb. For example, “peas” is the object of the transitive verb “freeze” in (a) “You can freeze peas” and it is the subject of the intransitive verb in (b) “Peas freeze well.” Other examples are “open” and “boil.” EG (c) “We couldn’t open the window.” (d) “The window opened easily.” (e) “He had boiled the kettle.” (f) “The kettle boiled.” Some verbs are described as V OR V-ERG. Verbs described in this way have a transitive and intransitive use in the same way as the examples shown above and, in addition, they have an intransitive

use with a subject which is different from the object of the transitive verb. An example is “sail.” EG (g) “He sailed the boat towards Dover.” (h) “The boat sailed towards Dover.” (i) He sailed towards Dover.”

COBUILD (1987) は ergative verbs には厳しい制約が適用される場合と緩やかな制約が適用される場合があると主張している。例文(b)の主語 *peas* は例文(a)の動詞 *freeze* の目的語である。これは動詞 *freeze* へ対する制約 (restriction) によって自動詞の主語には他動詞の目的語しかなれないからである。例文(h)の主語 *boat* は例文(g)の目的語である。これは動詞 *sail* に対する制約が働いているからである。しかし、動詞 *sail* に対する制約は動詞 *freeze* に対するほど強くない。その結果、例文(i)では動詞 *sail* は主語として *boat* ではなく *he* を取れるということになる。ただし、例文(g)の目的語を省略したのだという説明もできそうである。さらに、自動詞の例文の中に様態の副詞を伴っているものがあることに注意すべきである。(b)の *well*, (d)の *easily* である。(h)も様態の副詞ではないが、副詞句 *towards Dover* を伴っている。「様態の副詞を伴う」という特徴は能動受動態 (active-passive) と説明していたときから存在するものである。

COBUILD (1987) には CD-ROM 版がある⁽¹⁴⁾。検索機能⁽¹⁵⁾ を使って GRAMMAR のウィンドーに *ergative* と入力すると、例えば、次のような結果が表示される。

表 1

<p>abate /əbeɪt/ abates, abating, abated When something abates or when someone abates it, it becomes much less strong or widespread; a fairly formal word. EXAMPLE: My terror abated a little... The industry should use the best practicable methods to abate pollution. GRAMMAR: ergative verb SYNONYMS: lessen ANTONYMS: increase SUPERORDINATE: decrease</p>
--

検索数合計は 739 件である。*abate* は検索 1 件目である。GRAMMAR の欄にある *ergative verb* という表示は COBUILD (1987) の V-ERG と V OR V-ERG とを包括した概念であると思われる。

『ジーニアス英和大辞典』は、*ergative* の記述の中で「この種の動詞は約 600 ある」と述べている。この記述では、はっきりした数字は不明で論拠も分からない。しかし、

COBUILD on CD-ROM のおかげで具体的な数を土台にして ergative verbs について論じることができる⁽¹⁶⁾。

COBUILD (1987) の記述は綿密である。英語の ergative verbs の総数は 739 件だと即断してはならない。COBUILD on CD-ROM で検索された ergative verbs には、quiet のような一語動詞と quiet down のような句動詞（動詞＋副詞）の両方が含まれている。その内訳であるが、手作業で数えてみると、739 件のうち、一語動詞の数は 640 件、句動詞の数は 99 件である。

収集した 739 件の ergative verbs の一覧は小論の末尾に付録として掲載されている。付録の一覧の中で、例えば、erode (1) erode (2) のように表記してある。この括弧付きの数字は筆者が便宜的に付けたものであるが、COBUILD (1987) の記述に基づいている。erode は 2 つの語義に分けて説明されている。語義 1 は “If rock or soil erodes or is eroded by the weather, sea, or wind, it cracks and breaks so that it is gradually destroyed.” である。語義 2 は “If someone's power, authority, rights, etc. erode or are eroded, they are gradually destroyed or removed.” である。erode の場合には語義 1 と語義 2 それぞれに V-ERG の表示がある。turn は (1) から (7) までである。しかし turn の語義は 7 個ではない。COBUILD (1987) は turn に 39 個の語義を与えている。この中の語義 2, 3, 5, 9, 12, 13, 16 に V-ERG の表示がついている。小論ではこの 7 項目に (1) から (7) の通し番号をつけた。

この turn を例にして議論を進める。COBUILD (1987) は turn には 7 種類の ergative verb としての用法があると説明している。語義の細かい区分を捨象して 1 つの語彙素 turn は 1 つの ergative verb であるにとらえて、739 項目を観察してみた。一語動詞の語彙素数は 491 件、句動詞の語彙素数は 81 件である。英語にはいくつの ergative verbs があるのかという質問に対する素朴な答えは 491 ということになる⁽¹⁷⁾。

さて、491 個の ergative verbs は慣用句 (idiom) のように固定した表現の名称なのか、あるいは、次々と新しい動詞が ergative verbs になるような生産的な仕組み (productive process) なのだろうか。この疑問の答えを探るために、異なり語数 739 件の ergative verbs の用例を観察していて気になったことを検討する。

上に引用したとおり、COBUILD (1987: 1620) の記述によれば、V-ERG と表示された動詞は他動詞用法と自動詞用法の両方を持つ。それぞれの動詞に対して 2 つの用法が例示されていることが期待される。しかしながら、739 件の記述を見ていくと、どうも期待通りではないことが分かる。用例の示し方には 4 種類あることが分かった。つまり、(1)自動詞と他動詞の両方の用例を示している場合、(2)自動詞の用例のみを示している場合、(3)他動詞の用例のみを示している場合、(4)用例を示していない場合の 4 種類である。739 件を、この 4 つの基準に従って分類してみた。さらに自動詞と他動詞の両方の用例

を示している場合に、自動詞の主語と他動詞の目的語が同じ名詞になっているかという基準も加えた。COBUILD (1987: 1620) では、例文(a) You can freeze peas と例文(b) Peas freeze well で peas は共通の名詞である。

調査結果は A4 で 28 ページに及ぶ大部なものになった。ここでは、open (1), open (2), open (3), open (4), advance を例にとって調査の様子を説明する。

表 2

	自動詞と他動詞	同じ名詞	自動詞	他動詞
open (1)	○	○ door		
open (2)			○	
open (3)				○
open (4)	○	×		
advance	×		×	×

open (1) に挙げられている用例は次の通りである。

- (54) She opened the door with her key. [他動詞]
 (55) The door opened. [自動詞]

他動詞用法と自動詞用法の両方が例示されている。共通の名詞 door が他動詞の目的語と自動詞の主語になっている。

open (2) に挙げられている用例は次の通りである。

- (56) He sat outside, waiting for the bar to open. [自動詞]
 (57) When does the library open? [自動詞]

2つの用例は、どちらも自動詞用法のものである。しかも例文(56)は open の自動詞用法を例示しているが to 不定詞の意味上の主語で、独立文の主語ではない。

open (3) に挙げられている用例は次の通りである。

- (58) The allies opened a general offensive against them. [他動詞]

挙げられている用例は他動詞用法のものである。

open (4) に挙げられている用例は次の通りである。

- (59) It took three days to clear the snow and open the road. [他動詞]
(60) The crowd opened and let us pass. [自動詞]

他動詞用法と自動詞用法の両方が例示されている。しかし、他動詞の目的語は road で、自動詞の主語は crowd と異なっている。

advance の場合は、“When prices or values advance, or when you advance them, they increase in amount” という定義文が与えられ、GRAMMAR で ergative verb と記述されているだけである。確かに定義文の前半で自動詞用法を例示し、後半で他動詞用法を示していると読むことは可能であるが、具体的な用例を示しているわけではない。

V-ERG と表示された動詞には他動詞用法と自動詞用法の両方の例文が COBUILD で提供されているだろうかという疑問に答えるために、739 件の ergative verbs を表 2 で示した基準に従って分類した。一語動詞と句動詞を分けて分類すると、以下の(A)から(H)のように 8 種類に分かれた。なお全ての語例はこの 8 区分に分けて末尾に付録として掲載されている。

- (A) 自動詞と他動詞の両方の例文が掲載されている一語動詞：407 語
- (B) 自動詞と他動詞の両方の例文が掲載されている句動詞：47 語
- (C) 他動詞の例文のみが掲載されている一語動詞：109 語
- (D) 他動詞の例文のみが掲載されている句動詞：22 語
- (E) 自動詞の例文のみが掲載されている一語動詞：104 語
- (F) 自動詞の例文のみが掲載されている句動詞：25 語
- (G) 例文が掲載されていない一語動詞：21 語
- (H) 例文が掲載されていない句動詞：4 語

自動詞と他動詞の両方の例文が掲載されている割合であるが、ergative verbs 全体で見ると 739 語中 454 語で 61.4% を占める。一語動詞と句動詞を分けて考えてみる。一語動詞の場合は 641 語中 407 語で 63.5% を占める。句動詞の場合は 98 語中 47 語で 48.0% を占める。句動詞よりも一語動詞の方が自動詞と他動詞の両方の例文が掲載されている割合が高いことが分かる。しかしながら、一語動詞の 4 割近くでは片方の例文しか掲載されていないか、あるいは全く例文が出ていないというのは意外な発見である。

COBUILD (1987: 1620) で示されている厳密な V-ERG の定義では、他動詞の目的語と自動詞の主語は同じ名詞である必要がある。例文(a) You can freeze peas と例文(b) Peas freeze well で例示されている通りである。この条件を満たしている動詞は 22

件あった。以下に例文を引用する。当該の動詞には下線を引き、共通の名詞は斜体字にする。

- (61a) The strain of looking after her had considerably aged *him*. [他動詞]
(61b) She was dismayed to see how much *he* had aged. [自動詞]
(62a) The questions raised by the new biology simply boggle the *mind*.
[他動詞]
(62b) The *mind* boggles. [自動詞]
(63a) He boiled the *kettle* and made the tea. [他動詞]
(63b) The *kettle's* boiling. [自動詞]
(64a) It was Ted who broke the *news* to me. [他動詞]
(64b) The *news* broke in Paris that Kennedy had been shot. [自動詞]
(65a) Her friends tried to cheer *her* up, telling she wasn't missing much.
[他動詞]
(65b) *She* cheered up a little as Miss Livingstone went out. [自動詞]
(66a) He unbuttoned his shirt and contracted his stomach *muscles*.
[他動詞]
(66b) The *muscle* contracts between these two points. [自動詞]
(67a) Remove all skin and bones, and flake the *fish*. [他動詞]
(67b) Simmer very gently until the *fish* flakes easily. [自動詞]
(68a) He tries to focus his *eyes* on a painting above Ellen's head. [他動詞]
(68b) His *eyes*, bandaged for twenty-four hours, would not focus. [自動詞]
(69a) As we cannot study all resources, I propose to focus *attention* on one.
[他動詞]
(69b) *Attention* focused on Jack. [自動詞]
(70a) The pain of the disease caused him habitually to furrow his *brow*.
[他動詞]
(70b) Sutherland's *brow* furrowed. [自動詞]
(71a) She honked her *horn* when she saw me. [他動詞]
(71b) *Horns* honked incessantly. [自動詞]
(72a) ...the fear that knotted the pit of his *stomach*. [他動詞]
(72b) My shoulders tightened and my *stomach* knotted as I searched for the
right path. [自動詞]
(73a) It lashes its *tail* in frenzy. [他動詞]

- (73b) The *tail* lashed briefly. [自動詞]
(74a=54) She opened the *door* with her key. [他動詞]
(74b=55) The *door* opened. [自動詞]
(75a) The stones under our feet seemed to radiate *heat*. [他動詞]
(75b) We could feel the *heat* radiating from the sandstone walls. [自動詞]
(76a) He had to ring the *bell* several times before the door was opened.
[他動詞]
(76b) In the distance a church *bell* was ringing. [自動詞]
(77a) Lynn glanced at Marsha, who rolled her *eyes* hopelessly. [他動詞]
(77b) His *eyes* rolled wildly. [自動詞]
(78a) How are we going to shift these *stains*? [他動詞]
(78b) If the *stain* still doesn't shift, try this. [自動詞]
(79a) I shut the *door* quietly. [他動詞]
(79b) When the ferret goes in, the *door* shuts behind him. [自動詞]
(80a) She went out slamming the *door* behind her. [他動詞]
(80b) Out in the street a car *door* slammed. [自動詞]
(81a) He stood the *bottle* on the bench beside him. [他動詞]
(81b) The empty wine *bottles* stand in a neat row against the wall. [自動詞]
(82a) Howard turns the *van* towards the exit. [他動詞]
(82b) The *van* turned into the Bristol Road. [自動詞]

「自動詞と他動詞の両方の例文が掲載されている一語動詞」が 407 語ある中で、例文で他動詞の目的語と自動詞の主語が同じ名詞を使っている動詞は 21 件であった。具体的には、age, boggle, boil, break, contract, flake, focus (1), focus (3), furrow, honk, knot, lash, open, radiate, ring, roll, shift, shut, slam, stand, turn の 21 件である。「自動詞と他動詞の両方の例文が掲載されている句動詞」が 47 語ある中で、例文で他動詞の目的語と自動詞の主語が同じ名詞を使っている動詞は、cheered up の 1 件だけである。それぞれ、全体数に対する比率を計算すると、一語動詞の場合は 5.15% であり、句動詞の場合は 2.13% となる。「他動詞の目的語と自動詞の主語に同じ名詞が使われる」ということが英語の ergative verbs のプロトタイプ的な特徴であるとするならば、あまりにも不十分な例示の割合だと思われる⁽¹⁸⁾。

他動詞に挙げられている例文にはもう 1 つ問題点がある。受動態の例文が多すぎないかということである。きちんとした受動態にもなっていないくて他動詞の過去分詞が例文に含まれているだけというものもある。

具体的な数を数えてみた。「自動詞と他動詞の両方の例文が掲載されている一語動詞」では、他動詞の例文が受動態になっているものは63件、他動詞の例文が過去分詞になっているものは7件で、他動詞の例文が能動態で示されていないものは、407例中の17.2%を占める。

「自動詞と他動詞の両方の例文が掲載されている句動詞」では、他動詞の例文が受動態になっているものは7件、他動詞の例文が過去分詞になっているものは1件で、他動詞の例文が能動態で示されていないものは47例中の17.0%を占める。

「他動詞の例文のみが掲載されている一語動詞」では、他動詞の例文が受動態になっているものは21件、他動詞の例文が過去分詞になっているものは5件で他動詞の例文が能動態で示されていないものは109例中23.9%を占める。

「他動詞の例文のみが掲載されている句動詞」では、他動詞の例文が受動態になっているものは8件で、他動詞の例文が能動態で示されていないものは36.4%を占める。

全体としては、能動態⁽¹⁹⁾の例文が期待される585件の動詞の中で、112件(19.1%)で能動態の例文が示されていない。

受動態または過去分詞が他動詞用法の例文に使われている例を示す。下線は筆者がつけたものである。

(83) He announced that the trial would be adjourned until the next morning.

(84) a capsized boat

112件の例については小論末尾の付録で印をつけてある。他動詞の例文が受動態になっている場合は、adjournのように下線を引いてある。他動詞の例文が過去分詞になっている場合は、capsizedのように下線を引いた上で斜体字にしてある。

確かに能動態を受動態に言いかえることはできる。例えば、Quirk et al. (1985: 1176) は、目的語を1つ取る動詞 (monotransitive verb) の説明で “Direct objects are typically noun phrases which may become the subject of a passive clause” と述べて次のような例を挙げている。

(85) Tom caught the ball.

(86) The ball was caught (by Tom).

しかし、Quirk et al. は直接目的語の定義をしているのであって、他動詞の定義をしているわけではない。

学習文法に目を向けてみる。江川 (1991: 188-189) は、S+V+Oの説明で17個の例

文を使っているが、受動態の例文は2つだけである。自動詞用法の marry と他動詞用法の be married の比較している。綿貫 (2008: 38-39) は、S+V+O の説明で6個の例文を使っているが受動態の例文はゼロである。

COBUILD (1987) は外国人用の学習文法書ではない。しかしながら、英語を外国語とする人々が使うことを想定しているのだから、他動詞の典型的な使い方が分かるような例文を示す必要があるように思われる。

ergative verbs は生産的に生み出されるのかという疑問の答えはどうなるだろうか。一語動詞 620 語がある中で「自動詞と他動詞の両方の例文が掲載されている一語動詞」は 407 語である。残りの 213 語では、他動詞または自動詞の一方の例文しか掲載されていない。同じ動詞に他動詞用法と自動詞用法の両方があるという COBUILD (1987) が規定する ergative verbs であるための緩やかな条件を満たしていない。ergative verbs であるための厳しい条件である「他動詞の目的語と自動詞の主語は同じ名詞である」を満たしている動詞は 21 語しかない。

残念ながら、COBUILD は ergative verbs の生産的な仕組みを記述しているとは言えないと思われる。

なお、例文(1)の screen であるが、COBUILD は V=ERG の表示を与えていない。次のような例文が出ている。

(87) His earlier films were only screened in France. (COBUILD 1987: 1298)

他動詞の受動態である。自動詞用法は出ていない。

5. COBUILD の文法書における ergative verbs の記述

4 節では COBUILD (1987) での ergative verbs の記述は不十分であるという分析結果を得た。同辞書の編者は英文法書も編集している。本節では Sinclair (1996) と Sinclair (2004) における ergative verbs の記述を簡潔に紹介し検討する。

Sinclair (1996: 474-492) では、ergative verbs を意味によって分類し 28 のグループに分けている。例えば、グループ 1.1 “the change group” には alter, change, metamorphose, vary が入っている。COBUILD (1987) と同じ著者による文法書なので、ergative verbs の例にどのくらいの異同があるかを調べてみた。

28 グループに分けて提示されている例をアルファベット順に直して数えてみると次のようなことが分かった。一語動詞の延べ語数は 510 語である。延べ語数と言う理由であるが、Sinclair (1996) は COBUILD (1987) と同様に、動詞の語義ごとに ergative

であるかないかの記述をしている。例えば、blow はグループ 1.2 の “the break group” とグループ 1.26 の “the hoot group” の 2 か所に記載されているので語形は同じであるが、延べ語数としては 2 と数えられる。

グループ分類を度外視して、異なり語数で数えると 417 語である。COBUILD (1987) での ergative verbs の異なり語数が 491 語であるから、15%ほど減少している。両方のリストを比較すると、COBUILD (1987) に出ていない語が 95 語⁽²⁰⁾ がある。COBUILD (1987) の 491 語に加算すると 586 語となる。残念ながら、例文(1)の screen は追加に入っていない。

ergative verbs の定義であるが、Sinclair (1996: 474) は、V と Vn の 2 つのパターンで使われる動詞として次の例を挙げている。

(88) John broke the vase. (Sinclair 1996: 476)

(89) The vase broke. (Sinclair 1996: 476)

(90) The vase was broken. (Sinclair 1996: 476)

(88)の目的語が(89)で主語になると指摘している。(89)の自動詞文と(90)の受動文との意味の違いについては、Sinclair (1996: 476) は次のように述べている。(89)では花瓶が自然に壊れたか誰かが壊したことを表している。(90)では花瓶が自然に壊れたのではないことは分かっているが誰が壊したかがわからないことを表現している。微妙な違いがありそうである。Sinclair (1996: 475) は(89)について、誰が壊したかを話し手や書き手は知っているのだが意図的に隠している場合にも使うと述べている。換言すると、受動文は行為者(破壊者)が分からない場合に使い、自動詞文は行為者を隠したい場合に使うということになる。

4 節では、COBUILD (1987) での ergative verbs の例示が不十分だという指摘をした。2 つの問題点があった。1 つめは「自動詞と他動詞の両方の例文が掲載されている一語動詞」が 407 語ある中で、「例文の中で他動詞の目的語と自動詞の主語が同じ名詞を使っている動詞」は 21 件 (5.15%) しかないというように少ないということである。2 つめは他動詞の例文が受動態で示され、能動態で示されていないものは 63 件 (17.2%) と多すぎるのではないかということである。

これらの問題点は Sinclair (1996) では改善されている。ergative verbs の異なり語数 417 語に対して、自動詞と他動詞を組にした例文は 85 組提示されている。その中の 36 組では、他動詞の目的語と自動詞の主語に同じ名詞が使われている。例えば次のような例である。下線とイタリックは筆者が追加した。

- ⑨1) If there is a leader, will the leadership rotate among the members?
(Sinclair 1996: 489)
- ⑨2) The new party rules rotate the leadership. (Sinclair 1996: 489)

他動詞の例文が受動態で提示されているものは 36 組中、次の 1 例だけである。

- ⑨3) At one stage during the day there was every chance that the meeting might break up without any resolution being passed at all.
(Sinclair 1996: 490)
- ⑨4) The meeting was broken up and was called again at six o' clock this morning. (Sinclair 1996: 490)

Sinclair (1996: 482, 508) は easily や well などの副詞を伴う ergative verbs があると述べて次のような例を挙げている。

- ⑨5) Marrows don't freeze well, but they can be stored by hanging in nets.
(Sinclair 1996: 482)

Sinclair は 32 語⁽²¹⁾ を取り上げているが、そのうちの bake, clean, cook, cut, read, sell, wash は Jespersen (1949) または綿貫 (2008) で能動受動態 (activo-passive) になれる動詞として取り上げているものと共通である。

Sinclair (2004: 110-111) の ergative verbs の定義も COBUILD (1989) や Sinclair (1996) と共通であり、他動詞の目的語が自動詞の主語として使われる動詞である。簡潔な記述のため、53 語が取り上げられているだけであるが、次の例文は注目に値する。

- ⑨6) He sells books. (Sinclair 2004: 110)
- ⑨7) This book is selling well. (Sinclair 2004: 110)
- ⑨8) She handled a machine gun. (Sinclair 2004: 110)
- ⑨9) This car handles very nicely. (Sinclair 2004: 110)

⑨6)と⑨7)は他動詞文の目的語と自動詞文の主語が共通の名詞であることを例示している。⑨8)と⑨9)は両者が共通でない場合もあることを示している。⑨7)と⑨9)の自動詞文には、それぞれ well と nicely という様態の副詞が使われている。⑨7)は江川 (1991:186) の(11)にそっくりであり、⑨9)は綿貫 (2008: 586) の(16)に類似している。両者とも能動受動態を議論

している部分で使われている。Sinclair (2004) が様態の副詞が必要としている動詞の中で、handle は綿貫と共通であり、stain は Jespersen と共通である。ergative verbs の下位分類として能動受動態になる動詞があると考えてもよいかを、さらに研究する必要がある。

6. 結 び

小論の目的は次の英文で has screened という能動態がなぜ使われているのかという疑問に答えることであった。

(100=1) This funny, and harrowing, American-made cameo of Japan's domestic dolphin hunt has screened in Australian cinemas and in 14 countries.

2 節の終わりでは、2 つの英和辞典が screen の自動詞用法を能動受動態と説明しているが、例文(1)を能動受動態と分析しようとしても、Jespersen の 2 つの基準に当てはまらないのではないかと疑問を呈した。1 つめの基準は「説明のための形容詞や副詞を伴っていること」である。(1)では説明のための副詞、または様態の副詞は使われていない。しかし、in Australian cinemas and in 14 countries という場所を表す副詞句は使われている。Jespersen の条件を「副詞句を伴うこと」と緩やかにすれば、能動受動態と分析することができる。Sinclair (2004) は副詞類 (adverbial) を必要とするという緩やかな条件をつけている。

screen を ergative verbs と扱っていいかという問題であるが、5 節の終わりで議論したように、能動受動態になる動詞が ergative verbs の下位分類であるならば、正しい扱いということになる。

最後に(1)の has screened が has been screened と受動態になっていない理由を考察する。Lyons (1968: 366-367) は次のような例を取り上げている。

(101) The books were sold quickly. (Lyons 1968: 366)

(102) The books sold quickly. (Lyons 1968: 366)

受動文(101)は agent-oriented であり、自動詞文(102)は process-oriented だと述べている。つまり、(101)では本が売れたのは表現されていない行為者のおかげであり、(102)では本そのものが売れる性質を持っていたということになる。類似した議論は綿貫が(16) “This car

handles well.” に対して行っている。車自体に優れた操作性が備わっているという議論である。

さて、(1)の cameo (珠玉の短編映画) は、「自然に上映される優れた性質を持っている」ということだろうか。(1)がでている新聞記事は、オスカー賞を取った The Cove というアメリカ映画が、その舞台となっている日本では、まだ公開されていないことを批判している。(1)の直後には “But it has never had a commercial release in the country it portrays.” という英文が続いている。「日本でも自然に公開せよ」という記者の主張と思われる。もしも has been screened と受動態にすると表現されていない行為者 (映画の公開者) に視点が移る可能性がある。(89)の自動詞文と(90)の受動文について、受動文は行為者が分からない場合に使い、自動詞文は行為者を隠したい場合につかうと議論した。映画の配給会社は分かっているが、それに焦点を当てないために他動詞文や受動文を避けて、自動詞文を選択したと考えられる。

《注》

- (1) 竹村日出夫 他 (2021: 32) に出ている英文を使用した。
- (2) “screen, v.”. OED Online. September 2021. Oxford University Press. <https://www.oed.com/view/Entry/173441> (accessed September 23, 2021).
- (3) 下線を引いた単語は、後述する Jespersen (1949: 347-349) で取り上げられている 35 語の中にある。
- (4) 渡辺 (2016: 50-53) と同じ調査法を使った。衣笠 (2010: 31-37) と赤野 (2014: 30-34) の教える方法に従って、Google をサイト内検索した。検索する語群は “The house sold yesterday.” で「語順も含めて完全に一致するもの」と指定した。検索する言語は「英語」、検索する地域は「アメリカ合衆国」、検索するサイトは「.edu」とし、アメリカの大学内で発信される英語を検索対象とした。
- (5) http://nldslab.soe.ucsc.edu/charactercreator/film_corpus/film_2012xxxx/imsdb.com/Rock,-The.html (2021年9月28日にアクセス)
- (6) 下線を引いた 10 語は、後述する Jespersen (1949: 347-349) で取り上げられている 35 語の中にある。残りの 11 語の由来は不明である。
- (7) 後述する Dixon (1994) にある通り、自動詞の主語と他動詞の目的語に共通する「格」は絶対格 (absolutive) と呼ぶ方が普通と思われる。ここでは下宮の名称を尊重した。
- (8) 『新英和大辞典』(2002: 824) は ergative の説明に Lyons のこの 2 つの英文を使っている。ただし、『新英和大辞典』は、この英文を説明のためのメタ言語として使っている。「能格」はエスキモー語、バスク語などで他動詞文の主語の格を指し、(89)と(40)の the stone (自動詞の主語と他動詞の目的語) は絶対格を取っているというように、英語とは別の言語における文法現象であることを記述している。
- (9) OED Online は Lyons (1968: 352) を ergative の用例として引用している。“ergative, adj.”. OED Online. August 2021. Oxford University Press. <https://www.oed.com/view/Entry/63978?redirectedFrom=ergative> (accessed August 29, 2021).
- (10) Halliday (1967: 46-47) が該当箇所と思われるが、(43)と(44)は出ていない。Halliday は次のような例を取り上げている。(a) She washed the clothes. (b) The clothes were washed.

- (c) The clothes washed easily. (d) This material doesn't / won't wash. Halliday は(a), つまり, 他動詞文の主語を ergative と呼んでいる。(b)と(c)の違いに着目して, 受動文(b)は agent-oriented であり, 自動詞文(c)は process-oriented だと述べている。
- (11) Andersen (1968: 12-13) が該当箇所と思われるが, (43)と(44)は出ていない。類似例として (a)She polished the table. と(b) The table polished well. が出ている。Andersen は(a)と(b) は Jespersen の 'activo-passives' の例であると述べ, 自動詞の方には様態の副詞 (manner adverbial) が必要であることにも言及している。ergative という用語の使い方であるが, Andersen は次の(c)と(d)で他動詞の主語 he を ergative と呼んでいる。(c)He polished the table with his cream. (d)He cut the bread with a knife. Andersen は(c)の the table と (d)の the bread を non-ergative と呼んでいる。
- (12) ergative という open が例に使われることが多いようだが, Cambridge Dictionary on line では次のように close を取り上げている。
- For example, close is an ergative verb : I closed the door | The door closed (<https://dictionary.cambridge.org/dictionary/english/ergative>)
- (13) 小島 (1989: 56-57) は COBUILD (1987) が用例は全て引用文とする原則を貫いている理由は 2 つあるとしている。1 つ目は OED より受け継がれている記述的辞書編集の態度があるから。2 つ目は語用論や社会言語学などからの影響を受けて単語の語法だけでなく, その単語が用いられている文脈や場面を引用文によって示そうとしたからと小島は説明している。
- (14) Collins Cobuild on CD-ROM は 1995 年に発行された。筆者が確認する限り, 内容は COBUILD (1987) のものである。同年に出版された紙版の辞書の第 2 版の内容ではない。
- (15) COBUILD on CD-ROM は windows 95 の時代に開発されたソフトウェアである。Windows 7 では動作したが, Windows 10 では筆者が確認する限り動作しない。
- (16) Collins Cobuild English Language Dictionary が出版されたのは 1987 年と今から 35 年前である。古い資料だという批判を受けそうである。しかし, 土肥 (1989: 96) が指摘するとおり, ergative という概念を記述に取り入れた学習辞典は COBUILD が最初である。また, CD-ROM 版で ergative という項目を検索できる資料は他にないと思われる。Fontenelle (1997: 231) は, "The Cobuild dictionary is, to my knowledge, the only dictionary that explicitly distinguishes ergative verbs, which are coded as V-ERG." と述べている。Fontenelle (1997) の記述は Sinclair (1995) Collins Cobuild English Dictionary New Edition でも V-ERG という表示が取り入れられていることを含めていると思われる。
- (17) cleave (1) と cleave (2) は語源の異なる同音異義語であるので, 2 つの独立した語彙素として数えた。
- (18) 土肥 (1989: 101) は COBUILD (1987) で V OR V-ERG の表示がついている動詞 bake について, Atkins (1988: 108) を典拠として, 問題点を指摘している。「コーパスの中で実例数が 291 件ある中で, 自動詞用法は 9 件しかない。他動詞構文の方が圧倒的に多い中で, COBUILD が V-ERG または V OR V-ERG という表示を用いて学習者に提示するほどの重要な構文であるのか」と述べている。
- (19) COBUILD (1987) には, USU PASS (usually passive) という文法表記がある。この表記がある場合には例文を受動態で提供の方が望ましいことになる。「自動詞と他動詞の両方の例文が掲載されている一語動詞」の中で, 「例文が受動態になっている動詞」は 70 件ある。この中で USU PASS の表記があるものは "distort, erode (2), fossilize (1), fuse (2), interrelate, intertwine, interweave, lodge, transfer, unionize, waft" の 11 件である。「他動詞のみの例文が掲載されている一語動詞」の中で「例文が受動態になっている動詞」は 26 件ある。この中で USU PASS の表記があるものは "entwine, fossilize (2), polarize,

- refract” の 4 件である。受動態で例文を提供する必然性がない例の方が多くに思われる。
- (20) Sinclair (1996) に新しく記載されているのは次の 95 語である。つまり, blacken, blare, build, char, chink, clench, collect, concertina, constrict, convene, convulse, crash, crash-hand, crisp, curve, decompose, deform, degrade, dehydrate, demerge, demobilize, depreciate, derail, detach, digest, dilute, disengage, dissipate, dissolve, distend, ditch, empty, feed, flare, fog, globalize, grow, hush, interview, jumble, jut, light, lower, macerate, manifest, mend, mist, mobilize, mutate, naturalize, navigate, overstretch, panic, perish, premiere, quieten, ratchet, recommence, reconvene, redden, redeploy, redouble, regenerate, reorganize, restart, retrain, reunite, revolve, rewind, rot, ruffle, sail, scorch, scuff, shake, short-circuit, sign, slosh, snag, steam, still, stir, substitute, swerve, tack, taper, tauten, thrash, tie, tinkle, unscrew, unwind, vary, worry の 95 語である。
- (21) 32 語は, apply, bake, boil, brown, char, clean, cook, crisp, cut, defrost, display, dissolve, drain, fold, freeze, glue, grill, infuse, lift, macerate, marinade, marinate, mature, melt, percolate, read, reduce, sell, simmer, steam, thaw, wash である。

参考文献

- 赤野一郎 堀正弘 投野由紀夫 2014 『英語教師のためのコーパス活用ガイド』大修館書店
市川三喜 1953 『英語学事典』研究社
江川泰一郎 1991 『英文法解説』改訂三版 金子書房
大塚高信 編 1970 『新英文法辞典』改訂増補版 三省堂
衣笠忠司 2010 『Google 検索による英語語法学習・研究法』開拓社
小島義郎・竹林滋・大沢ふよう・斎藤弘子・土肥一夫・浅田幸善・中尾啓介 1989 「COBUILD
の分析」Lexicon No. 18. pp. 39-154 岩崎研究会 (『英語の辞書の比較と分析 第 5 集』pp.
1-116 に採録)
下宮忠雄 1979 『バスク語入門』大修館書店
綿貫陽 2008 『ロイヤル英文法』改訂新版 旺文社
岩崎研究会 編 2002 『英語の辞書の比較と分析 第 5 集』研究社
Atkins, Beryl, et al. 1988. “Anatomy of a verb Entry: from Linguistic Theory to
Lexicographic Practice” *International Journal of Lexicography*, Vol. 1, No. 2, pp. 84-126.
Andersen, J. M. 1968. “Ergative and nominative in English” *Journal of Linguistics*, Vol. 4, pp.
1-32.
Burzio, L. 1981. “Intransitive verbs and Italian auxiliaries” PhD dissertation, MIT.
Dixon, R. M. W. 1994. *Ergativity*. Cambridge University Press.
Fontenelle, Thierry. 1997. *Turning a Bilingual Dictionary into a Lexical-Semantic Database*.
Max Niemeyer Verlag: Tübingen.
Halliday, M. A. K. 1967. “Notes on transitivity and theme in English, part 1” *Journal of
Linguistics*, Vol. 3, pp. 37-81.
Jespersen, Otto. 1949. *A Modern English Grammar on Historical Principles*. Part III. George
Allen & Unwin Ltd.: London (reprinted in 1983 by Meicho Fukyu kai, Tokyo)
Lyons, John. 1968. *Introduction to Theoretical Linguistics*. Cambridge University Press.
Pesetsky, D. 1982. “Paths and categories” PhD dissertation, MIT.
Quirk, Randolph. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman:
London and New York.

Sinclair, John. 1996. *Collins Cobuild Grammar Patterns 1: Verbs*. Harper Collins Publishers: Glasgow and London.

Sinclair, John. 2004. *Collins Cobuild Intermediate English Grammar*. Harper Collins Publishers: Glasgow.

辞書

Delbridge, Arthur. 1991. *The Macquarie Dictionary*. Second edition. The Macquarie Library Pty Ltd.

Sinclair, John. 1987. *Collins Cobuild English Language Dictionary*. Harper Collins Publishers: Glasgow.

_____ 1995. *Collins Cobuild on CD-ROM*. Harper Collins Publishers.

Sinclair, John. 1995. *Collins Cobuild English Dictionary*. New Edition. Harper Collins Publishers: Glasgow.

小稻義男 1980 『新英和大辞典』第5版 研究社

小西友七 安井稔 國廣哲也 堀内克明 1994 『ランダムハウス英和大辞典』第2版 小学館

小西友七 南出康世 2001 『ジーニアス英和大辞典』大修館書店

高橋作太郎 2012 『リーダーズ英和辞典』第3版 研究社

竹林滋 小島義郎 東信行 2001 『ルミナス英和辞典』研究社

竹林滋 2002 『新英和大辞典』第6版 研究社

付録 (COBUILD が V-ERG と表示している動詞 739 の一覧)

(A) 自動詞と他動詞両方の例文が掲載されている一語動詞：407 語

abate, abort (1), abort (2), accelerate, accrue (1), accrue (2), accumulate, adjourn, age, alter, anchor, approach, arch, atrophy (2), audition, awake, awaken (1), bake (1), balance (1), bank, beach, begin, bend (3), bend (5), benefit, blast, bleach, blink, blow (1), blow (2), boggle, boil (1), boil (2), bowl, break (1), break (4), broaden (1), brown, bruise (1), bruise (2), buckle, budge, burn (1), burn (3), burst (1), burst (2), bus, calm, capsize, catch, chafe, change, chill, chip, choke, churn, circulate (1), circulate (2), clang, clatter, clear (2), click, clip, clog, clonk, close (1), cloud, coarsen, coil, colour, combine (1), combine (3), compress, conclude, continue (1), continue (2), continue (3), contort, contract, convert, cook, cool (1), correlate, corrode, crack (1), crease (1), crumble, crumple, crunch, crush, crystallize (1), curdle, cure, curl (1), dangle, darken (1), decrease, defrost, derive, detonate, develop, dig, dim (1), diminish, disband, discolour, disperse (1), disperse (2), distort, divide (1), divide (2), dock (1), double, drain, dribble, drill, drip, drop, drown, dry, ease, end, enlarge, enlist, erode (1), erode (2), escalate, evaporate, evolve, expand (1), explode, fade, fasten (1), fasten (2), fire, flail, flake, flap (1), flap (2), flash, flatten, flick, float (1), flood (1), flood (2), flush, focus (1), focus (3), fold (1), form (1), form (2), form (3), fossilize (1), foul, fray (1), fray (2), freak, freeze (2), freeze (5), furrow, fuse (1), fuse (2), fuse (4), germinate (2), grate, graze, group, halt (1), halt (2), halve, handle, hang, harden (1), harmonize, hatch, heal, heighten, hold, honk, hoot, hurt, improve, inch, increase, incubate (1), incubate (2), inflate (1), integrate (1), intensify, interlock, interrelate, intertwine, interweave, jam (1), jam (2), jerk, jingle, jolt, knot (2), lack, lash, lean, lengthen (1), lengthen (2), lessen, lift (3), lighten, lock, lodge (1), lodge (3), loosen, mark, mass, mature, mellow (1), mellow (2), melt, merge, metamorphose, mingle, mix, moderate, move, multiply, narrow (2), near, nurse, obtrude, ooze, open (1), open (4), operate (1), operate (2), overflow (1), overflow (2), overheat, overturn, overwork, pack, part, petrify (2), plunge, propagate, pucker (1), puff, quadruple, qualify, quicken (1), quiet, radiate, rally (1), rally (2), rank, rattle, reassemble, recline, reflect, reform, register, relate, relocate, report, resettle, rest, resume, rev, reverse, revive (1), revive (2), ring, rip, ripen, ripple, roast, rock (1), roll (1), roll (2), rotate, rub, run (1), run (2), run (3), rustle, scatter, screw (1), screw (2), scrunch, set, settle (1), settle (2), sharpen, shatter, shift (1), shift (2), shift (3), shorten, show (1), show (2), show (3), shrink (1), shrivel, shut (1), shut (2), singe, slacken (2), slam, slide, slot (1), slow, smash, snap (1), snap (2), soak, soften (1), soften (2), soften (3), sound, sour, spill, spin, splatter, splay, splinter, split (1), split (2), spoil, spout, spread (1), spread (2), spread (3), sprout (1), sprout (2), spurt, square, squirt, stabilize, stampede, stand, start (1), steer, stick, stiffen (2), stop (1), stop (2), stop (3), straighten, stream, strengthen (1), stretch, strike, submerge, suffocate (1), suffocate (3), swell, swing (1), swing (2), swing (3), swish, tear, tense, thaw, thrill, thump, tighten (1), tilt (1), tilt (2), tire, toot, topple, toss, trail, train, transfer, transplant (1), transplant (2), triple, turn (1), turn (2), turn (3), turn (4), turn (5), turn (6), twang, twine, twirl, uncoil, unfurl, unionize, unite (1),

unite (2), unlock, unroll, vibrate, waft, wake, wake up, waken, warm up, wash, wash out, whirl, whisk, widen (1), widen (3), withdraw, work, wrinkle

(B) 自動詞と他動詞両方の例文が掲載されている句動詞：47 語

break off, break up (1), break up (2), broaden out, build up, burn down, calm down, cave in, center around, centre on, centre round, check in, cheer up, cool down (2), double up, fan out, get out, get through, hold together, line up, move down, open up (1), open up (2), pair off, perk up, pile up (1), pile up (2), pull out (1), pull out (2), pull out (3), pull through (1), put up (1), put up (2), quieten down, rain down, settle down, show up, show up, silt up, slow down, speed up (2), spread out (1), spread out (2), tie up (2), tip over, turn against, turn up, wind up (1)

(C) 他動詞の例文のみが掲載されている一語動詞：109 語

ail, air, assimilate, awaken (2), bake (2), balance (2), ball, bang, beat, bend (1), bend (2), blanch, blur (1), blur (2), bolt, bounce, break (3), brighten, broaden (2), catapult, circulate (3), clack, cleave (1), clink, close (3), clot, concentrate, consolidate, crease (2), crop, crystallize (2), darken (2), deepen (1), de-escalate, deflect, diffuse (1), diffuse (2), dim (2), dip, elongate, entwine, exude, fatten, filter, focus (2), form (4), fossilize (2), fracture, freeze (4), frizzle, fry, grill, ground, harden (2), harden (3), hunch, ignite, impact, inflate (2), jar, kink, knot (1), land, lift (1), lift (2), lodge (2), marinate, narrow (1), normalize, open (3), ossify, poke, polarize, pop, puncture, quicken (2), reduce, reflate, refract, relax (3), rouse, scrape, simmer, sink, slop, slot (2), solidify (2), start (2), steady (1), steady (2), strengthen (3), swivel (1), tarnish, telescope, terminate, thicken, thin, twist (1), twitch, unfold, unstick, unzip, wag (1), wag (2), waggle, whiten, widen (2), wiggle, yellow

(D) 他動詞の例文のみが掲載されている句動詞：22 語

blow out, boil down, break down, close down, close up, dry up, erode away (1), even out, freeze over, get across, liven up (2), move up, narrow down, puff out, pull through (2), rev up, shut down, slow up, spill out, split off, wear away, wind up (2)

(E) 自動詞の例文のみが掲載されている一語動詞：104 語

angle, assemble, atrophy (1), back, bend (4), berth, blister (1), break (2), burn (2), circulate (4), clank, clash, clear (1), clear (3), clear (4), cleave (2), climax, close (2), close (4), clump, combine (2), condense, congeal, cool (2), crack (2), crinkle, curl (2), curl (3), deepen (2), deflate, dilate, dull, engage, enroll, expand (2), ferment, float (2), flutter, fly (2), fold (2), fragment, freeze (1), funnel, fuse (3), gather, germinate (1), graduate, industrialize, infuse, integrate (2), interchange, jangle, liquefy, marinade, mould, muster, open (2), originate, oxidize, pan, parade, perch, play (1), push, quiet down, rearm, re-form, refuel, regroup, relax (1), relax (2), reopen (1), retract, rock (2), root, run (4), rupture, shrink (2), slacken (1), slur, solidify (1), split (3), stall, stiffen (1), sting, strengthen (2), suffocate (2), sweep, swirl, swivel (2), tan, tangle, tighten (2), ting, toll, toughen, treble, twist (2), unravel, vaporize, warp, weaken, weather, wither, worsen

(F) 自動詞の例文のみが掲載されている句動詞：25 語

band together, blare out, blast out, cool down (1), dry out (1), dry out (2), erode away (2), form up, freeze up, get away, get off, get together, hold back, hot up, liven up (1), pull back, pull up, roll up, speed up (1), spread out (3), string out, tie up (1), wear down, wear out

(G) 例文が掲載されていない一語動詞：21 語

advance, balance (3), blister (2), blow (3), blow (4), bond, coagulate, dock (2), emulsify, federate, fill, fly (1), freeze (3), freeze (6), passivize, percolate, petrify (1), play (2), pucker (2), reopen (2), turn (7)

(H) 例文が掲載されていない句動詞：4 語

fetch up, run off, turn off, wind down

(原稿受付 2021 年 10 月 27 日)